

大曾根章介 堀内秀晃
久保田 淳 三木紀人
檜谷昭彦 山口明穂
編集

物語文学

第一卷

明治書院

編者

大曾根 章 介

久保田 淳

檜 谷 昭 彦

堀 内 秀 晃

三 木 紀 人

山 口 明 穂

研究資料日本古典文学
第一巻 物語文学

定価 3,900 円

昭和 58 年 9 月 25 日 初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16

発行者 株式会社 明治書院

代表者 三樹 彰

長野県長野市中御所町 2-30

印刷者 大日本法令印刷株式会社

代表者 田中 忠

発行所 株式会社 明治書院

〒101 東京都千代田区神田錦町1-16

電話 東京 (292) 3741 (代)

振替口座 東京 3-4991

© H. Horiuchi 1983 3391-26101-8305 製本 星共社

刊行の言葉

聖徳太子が撰政となり、十七条憲法の制定を初めとして種々の文化政策を打ち出した七世紀初頭から数えても、ほぼ十四世紀近くの歴史を有する日本文学の流れを一望の下に収めることは至難のわざである。しかも、多極化する国際社会にあって日本が文化国家としての役割を全うするに際して、まず自国の文化伝統への認識と省察を深めることは、今日における急務であろう。「汝自身を知れ」という言葉は常に真理である。自らの由つて来たる文化・文学に対する無関心さが進行しつつある現代において、特にこのことを痛感せざるをえない。

このような問題意識のもと、蒼古の歴史を有する日本古典文学と技術社会の先端にあるわれわれ現代人との架橋ともなるべき、平易でしかも正確な古典文学解題書を目指して、ここに本書を編んだ。既刊の姉妹編としての「研究資料現代日本文学」にならない、ジャンル別の編成とし、主要古典文学作品並びに作家の詳細な解題とともに、主要作品については原文を豊富に引用し、注解をも加えることによって、文学事典類では期待しがたい、文学鑑賞講座的側面をも具備するように努めた。さらに直接それら古典に触れようとする人々のために、参考文献、翻刻、最近の研究動向など、最新の情報を提供しようとした。

編者達のおおけない望みは、実際の教育の場に立つ方々の教材研究資料として活用して頂くことよって、学生・生徒が日本古典文学の豊かな流れの具体的な姿に触れ、その一部をなりとも味わう機縁となること、そしてまた、国文学・国語学研究者にとっては、各領域における今後のより深められた研究のための、ささやかながらも確乎たる足場を提供することにある。その意図に比して達成は必ずしも十全であるとは言いがたいであろうが、読者諸氏の御理解を得て、本書が末長く活用されることを願ってやまない。

昭和五十八年三月

凡 例

一、本巻は、『研究資料日本古典文学』の第一巻、物語文学である。扱う対象は中古の物語を中心として、中世の擬古物語・物語草子（お伽草子）の主要作品を加えた。

一、作品の配列は、年代順を原則としたが、ほとんどが成立時不明なので私意によつた部分が多い。物語草子のうち、『お伽文庫（草子）』二三篇に含まれるものは一括して並べた。

一、各作品についての解説は、〈概括〉〈成立および概観〉〈内容〉〈参考文献〉を柱とし、主要作品については、その〈本文〉を掲げ、通釈・語釈・解説を施した。それらの作品については、〈研究の動向〉をも加えた。

一、引用・出典の明示や、発行所・発行年の蔽密を期した。又、原典よりの引用は、「」を付し、原典どおりの仮名遣いを原則とした。

一、新聞・雑誌・単行本名は『』で示し、その他は「」とした。

一、本巻では、文学史の理解を考慮し、概観的項目と、コラムを適宜に設け物語文学理解の参考に供した。

目次

刊行の言葉

凡例

物語文学総説

平安時代の物語

竹取物語

伊勢物語

大和物語

平中物語

篁物語

多武峰少将物語

うつほ物語

落窪物語

源氏物語

狭衣物語

浜松中納言物語

夜の寢覚

堤中納言物語

とりかへばや物語

住吉物語

擬古物語

風葉和歌集

あさちが露

在明の別れ

松浦宮物語

海人の刈藻

苔の衣

いはでしのぶ

風につれなき

しづくに濁る

むぐら

石清水物語

しのびね物語

初瀬物語

わが身にたどる姫君

木幡の時雨

小夜衣

兵部卿物語

松陰中納言物語

物語文学総説	一	風葉和歌集	101
平安時代の物語	四	あさちが露	101
竹取物語	六	在明の別れ	105
伊勢物語	六	松浦宮物語	107
大和物語	七	海人の刈藻	108
平中物語	九	苔の衣	111
篁物語	10	いはでしのぶ	111
多武峰少将物語	10	風につれなき	111
うつほ物語	14	しづくに濁る	114
落窪物語	16	むぐら	116
源氏物語	16	石清水物語	117
狭衣物語	17	しのびね物語	119
浜松中納言物語	17	初瀬物語	119
夜の寢覚	18	わが身にたどる姫君	119
堤中納言物語	18	木幡の時雨	119
とりかへばや物語	19	小夜衣	119
住吉物語	19	兵部卿物語	119
擬古物語	19	松陰中納言物語	119

恋路ゆかしき大将	三二七	猫の草子	三二七
夢の通ひ路	三二八	浜出草子	三二八
風に紅葉	三二九	和泉式部	三二九
山路の露	三三〇	一寸法師	三三一
別本八重葎	三三三	さいき	三三三
やへむぐら	三三三	浦島太郎	三三四
散逸物語	三三四	横笛草子	三三六
お伽草子	三三八	酒吞童子	三三七
文正草子	三四一	秋月物語	三四〇
鉢かつぎ	三四三	秋夜長物語	三四一
小町草子	三四三	あきみち	三四四
御曹子鳥渡	三四四	鴉鷲合戦物語	三四五
唐糸草子	三四五	隠れ里	三四七
木幡狐	三四六	熊野の御本地のさうし	三四八
七草草紙	三四七	高野物語	三四〇
猿源氏草紙	三四八	三人法師	三四一
物くさ太郎	三四九	精進魚類物語	三四三
さざれ石	三五一	俵藤太物語	三四四
蛤の草子	三五三	化物草紙	三四六
小敦盛	三五三	福富長者物語	三四七
二十四孝	三五四	弁慶物語	三四八
梵天国	三五五	物語二百番歌合	三四〇
のせ猿草紙	三五六		

三五	物語と絵巻…三六
	慶像の原型…三九
	和泉式部―母と子…三〇
	『酒吞童子』の酒…三九
	稚児…三三
	俵藤太の名声…三五
	弁

物語文学総説

物語文学といっても、広狭さまざまの範囲がある。最も狭義の場合には、『竹取物語』以下の平安朝の仮作物語と、『伊勢物語』以下の歌物語をいう。第二には、平安朝の仮作物語の系列に属する鎌倉時代の擬古物語、室町時代の室町物語（中世小説）をも包括する場合である。これには、近世小説は除外されるのが普通であるが、仮名草子の一部には中世小説との差異がほとんど認められないものがあり、境界は微妙である。第三には、最も広義の場合で、『栄花物語』以下の歴史物語、『今昔物語集』などの説話文学、鎌倉時代の軍記物語の類までを含む。

本巻では第二の範囲の作品群を扱うことにした。虚構の方法で人の世の真実を照らし出そうとする仮作物語とその系列、および歌話をつうじて普遍的な生の様相を探ろうとする歌物語がここに含まれる。

〈神話から物語へ〉 古代には、各氏族がその祖霊の祭りをもち、その祖霊に関する伝承（語り言）を保持していた。それは氏族内の語り部によって管掌され、氏族の共同意識を保持確認するのに与つて力があつた。そこに述べられている神々の霊異は、この世で起こり得ないことがわかつていても、氏族の構成員にとつては真実なのであつた。しかしそうした氏族伝承は、大和朝廷の中央集権化が進むに従つて、朝廷の伝承として吸収され、各氏族と大和朝廷との関わり方を示す服属儀礼的のものとして位置づけら

れてゆく。その過程で、氏族構成員と氏族伝承との一体感が次第に失われてゆくが、これを三谷栄一はカタリゴトからモノガタリへの進展としてとらえている（『物語史の研究』有精堂、昭42）。

「物語」の最古の用例は『万葉集』の人麻呂歌集中の旋頭歌に見える。

青みづら依網よみの原に人も逢はぬかも 石走いはせる淡海あまのうみ島物語しまものがたり為

（巻七・二二八七）

「淡海島物語」の詳細は不明というよりほかないが、人麻呂との関連で、彼の近江の荒都を過ぐる時の歌が想起される。「淡海島」と地名を冠しているので、その土地に関する何かの物語であろうし、あるいは荒れる地霊を鎮魂するような物語ではなかったかとも想像される。カタリゴトからモノガタリへの進展をかいまみさせるはずの事例である。

〈漢文伝奇〉 古代において文字、すなわち漢字を専有する知識階級は神仙譚的な漢文伝奇を好んだらしい。『日本国見在書目録』には、搜神記・搜神後記・統齋諧記・靈異記・列仙伝・冥報記など多くの神仙譚や怪異小説が渡来したことがみえる。これらに親しんだわが国の知識人が、超自然的要素のあるモノガタリを漢文伝奇の世界に造型しようとするのは自然のなりゆきである。『万葉集』巻三には、『柘枝伝』の名が見え、それは吉野の人味稻あじのあづまと柘枝仙媛つばきのみこと（ヤマダワの枝の化した美女）との神婚説話であつたらしく、『懐風藻』のこれに因む詩七篇が吉野を仙境ないし桃源境とする意識に貫かれているところからみて、神仙譚的な色付けがなされていたらしい。その過程には『文選』や『玉台新詠』などの情詩や『遊仙窟』が大きな影響を与えていたはずである。また、

『丹後国風土記』には筒川の喚子（水江浦喚子）の話に伊預部馬養連の「記」があったという。五色の亀の化した美女が「天上仙家の人」であると名乗り、浦喚子を「蓬山」に導く。その人々は「群仙侶等」で、仙都の三年が人間の三百余年に当たるなど、不老長寿の神仙世界がそこに展開されるのは伊預部馬養の記を参照したからであろうか。「群書類従」の「浦島子伝」も浦島子に「羽客の上仙」たらしめようと約すなど「遊仙窟」的潤色が施されている（小島憲之『上代日本文学与中国文学』塙書房、昭37く40）し、『万葉集』巻九の、高橋連虫麻呂歌集から採録された「水江の浦島の子を詠む一首」では「海若神之女」が浦島子を「常代」の「海若神之宮」に導くなどや原型に近いことを思わせるが、ここでも「海若」の表記などに、藤原宇合周辺の文人としての虫麻呂の理解ないし潤色が見られるのである。

「物語のいで来始めの祖」である『竹取物語』の素材は、こうした神仙譚の要素を含む点で、男性知識人の食指を動かさせるものであったらしい。

〈仮名の発達〉 上代の万葉仮名は、楷書・行書体の範囲内で男子の仮名として用いられていたが、次第に簡略化がすすみ、草仮名から女手の仮名（平仮名）へという進展をみる。現在、草仮名の最古の遺品は貞観九（八六〇）年の「讃岐国司解」に添えられた讃岐介藤原有年の申文で、女手の遺品は藤原定家の臨摹になる紀貫之自筆の『土佐日記』巻末である。おそらく『古今集』から遡ること余り遠くないところに女手は成立したのであろう（小松茂美『かな—その成立と変遷—』岩波新書、昭43）。もちろん、女手が成立しても、装飾的意識から草仮名を用いる例はあるが、ともかく、

簡便、流麗なかたちで日本語を正確に記述できる文字が完成した意味は大きい。以後、女子をまじえた私的な世界では仮名が主要な表記となつてゆくのだが、それを準公的な世界に押し上げたのが歌合の記録や屏風歌、『古今集』の撰進であつたといえる。十一世紀の仮名文の遺品では、和歌や書状はあるが、物語や日記はほとんどないのが実状である。しかし物語もまた、和歌の蔭で盛んに仮名で書かれ、享受されていたという事実があつた。

〔作者と享受者〕 源為憲の『三宝絵』（永観二（九〇）年成）の序に、又物ノ語ト云テ女ノ御心ヲヤル物也。オホアラキノモリノ草ヨリモンゲク、アリソミ（有磯海）ノハマノマサゴヨリモ多カレド、木山川鳥獸^{トビ}モノ魚虫^{イサナ}ノ名付タルハ、物イハヌ物ニ物ヲイハセ、ナサケナキ物ニナサケヲ付タレバ、只海ノ浮木ノ浮ベタル事ヲノミイヒガナシ、沢ノ末己毛ノ誠^{マコト}ナル詞ヲバムスピオカズシテ、伊加乎女（伊賀ノ太平女イ）・土佐乃おとよ・以末女幾ノ（今様ノイ）中將・奈加為（観智本傍注中居、醍醐寺本長居）乃侍従^{ナニ}云ハル、男女奈^{ナニ}仁寄^ニ、花ヤ蝶ヤトイヘレバ（トイ）、罪ノ根、事業ノ林ニ露ノ御心モトイマラジ。（東寺観智院本）

とある。ここから、当時、異類物語や恋愛物語が盛んに作られていた様子をおうかがうことができるが、こうしたマイナーな物語の一群も「女の御心をやる物」であつたという指摘は重要である。『源氏物語』でも源氏が「あなむつかし。女こそものうるさがらず、人に欺かれむと生れつきたるものなれ（巻）と物語に熱中する玉鬘をからかうのも、女性が物語を相手に源氏などの入りこめない濃密な世界を形づくっていることから感じる疎外感を示す

のであろう。物語を享受するのは女性であった。

しかし、『竹取物語』『うつほ物語』『落窪物語』などの初期物語の作者には男性が想定されている。初期物語は下級官僚知識人の参与によって成ったのであった。こうした情況に『蜻蛉日記』の作者の投じた一石は大きかった。道綱母は物語的手法で自己の苦悩を解剖し、摂関体制下のひとりの女人の真実を自らの手で浮き彫りにしようとしたのである。この段階を経て紫式部の出現は可能になったし、女流作者の手になる王朝物語文学が花開いてゆくのである。鎌倉時代以降は再び男性作者も物語に手を染めるようになったが、これも時代相の然らしめたところである。

『物語の論』『三宝絵』によれば、物語は「浮べタル事」であり「誠」ならざるものであった。こうした「そらごと」が直ちに「罪ノ根」として否定的にみられたのは、源為憲が白楽天以来の「狂言綺語」の文学観をもっていたからである。為憲も第一次勧学会の会衆の一人であった。

これに対し、道綱母は「世の中に多かる古物語」を見ると「世におほかるそらごと」(ありふれた虚構)がもてはやされているとして、文学用語としての「そらごと」(虚構)を用いているが、「そらごと」に対してはあまり否定的ではなく、「そらごと」の物語に対して「身の土」の日記を風変わりな物語として提出しようという気持ちがあるばかりである。

紫式部は『源氏物語』蜚巻で、物語論を展開して見せる。源氏は物語を「すずること」「いつはりども」「そらごとをよくし馴れたる口つき」などと言い、玉鬘の抗議に逢って「世にある」「道々しく詳しくきこと」があると、日本紀などよりも真実を伝えるも

のとして、虚構方便論に入ってゆく。乱暴な要約をすれば、作者の受けた、心に籠めておけないような深い感動を、後世に伝えようがために虚構の方法を使うのであり、ちょうどそれは仏説の方便のように唯一の真実に帰してゆくものだというのである。虚構によって真実を語るといふ、虚構の積極的意義がここで提唱されたわけで、以後、この物語観が物語を支えることになる。『無名草子』で、俊成女は真実味のない虚構を「まことしからず」と批判の対象にし、実際の出来事をそのまま書いたと考えられていた『伊勢物語』『大和物語』などにはほとんど紙幅を与えていない。

『享受の方法』女性たちの物語享受の方法としては、玉上琢也の『物語音読論』も著名であるが、中野幸一は次の五つの方法を挙げる(『物語文学論』教育出版センター、昭46)。

(1) 他人に読ませて、それを聴きながら、自身は絵を見ているという形。

(2) 他人に読ませて、それを聴いているという形。

(3) 他人がそらで物語るのを聴くという形。

(4) 自分自身が直接目で読むという形。

(5) 自分自身が直接書き写すという形。

中野によれば、(1)～(3)は、物語の全貌に触れることのない、ダイジェスト的な二次的享受(1)は『源氏物語』東屋の「絵など取り出でさせて、右近に詞読ませて見たまふに」という、絵巻でも著名な場面。(3)は『更級日記』冒頭の上総の官舎での場面)であるとし、(4)(5)に至って始めて自己と作品との間に濃密な世界を形成しうるのだとしている。ともかく読者の年齢に応じ、現代と同様、さまざまな享受法があったのである。

(堀内秀晃)

平安時代の物語

〔伝奇的物語〕 上代から中古初頭にかけて、当時の知識人たちは、民間伝承の素材を掬い上げて数々の漢文伝奇をものしていったらしい。作者不明の『浦島子伝』、都良香の『道場法師伝』、紀長谷雄の『白箸翁伝』などが現在まで残って、僅かにその情況をかいまみさせている。そうした民間の説話や漢文伝奇を素材として枠組みや場面に利用しながら、新しい社会や文化の動向を適確にとらえて主題化し、登場人物に造型していったのが、伝奇的な仮作物語であった。そして『源氏物語』絵合の巻に「物語のいできはじめのおやなる竹取の翁」とあるように、その始発は『竹取物語』に置くことができるようである。

『竹取物語』は白鳥処女説話を骨子とし、難題解の部分では五人の貴公子が難題に対処する行動の醜さ、矮小さを諷し、昇天の部分では天上的なものと地上的なものとの対照のうちに人間のあり方を探ろうとしており、小品のためもあり、よくまとまった作品として強い印象を与えている。

続く『うつほ物語』は、『竹取物語』の伝奇性を琴の奇瑞の上に乗せながら、現実の貴族社会の物語たるべく試行錯誤の苦闘をくり返しつつ、求婚譚や立坊問題を政治的、風俗的な視野の中に収めて展開してゆく。文体も雑多で筋にもまとまりがないが、作品から感じられるエネルギーは、やはり草創期のものであるといえよう。

『うつほ物語』にやや後れて成った『落窪物語』は、継子いじめの説話の型を全体の枠組みとしていて、伝奇性は全く影をひそめている。ともすれば卑俗猥雑に流れ、マイナーな作品という印象が強く、その意味で『竹取物語』『うつほ物語』の系列とは異端である。同じ継子物語でも、散逸した『住吉物語』の方が高い評価を得ていたらしい。

〔歌物語〕 伝奇的物語とは異なり、貴族社会の和歌に関する口承説話「歌語り」から出発したのが歌物語である。歌物語は、和歌を話の頂点に据えて、その作歌事情を述べる短い章段の集積である。集積の方法には二通りあり、特定の人物を思わせる主人公の歌話を集成した形式をとる『伊勢物語』や『平中物語』と、主人公や内容も雑多な歌語りや和歌説話を、それなりの連想意識によって配列した『大和物語』とに分けることができる。これらの歌物語が現存の形をとるのは大体天曆期前後であるが、『伊勢物語』などは『古今集』の成立する延喜以前からの長い成長の歴史があり、在原業平のイメージに共鳴を覚える多くの人が、その成長を支えていた。その間、業平以外の作者の歌や伝承歌、読人しらずの歌なども多く取り込まれて、業平像の展開に寄与している。それらは業平の虚像なのであるが、その虚像によって業平像の真実が浮かび上がってくるのだという意識があったらしく、「いちはやきみやび」像の典型を造るとともに、すべての事柄が事実に基づくのだという志向もまた持ち続けられた。

歌物語が天曆期前後に集中するのは『後撰集』のような歌語りの勅撰集を産んだ時代の好尚の産物であろうが、天曆期を過ぎると歌物語は急速に衰退してしまふ。

〔源氏物語〕 伝奇的な仮作物語と、事実を伝えるのが建前の歌物語との二大系列が、十一世紀初頭に統合されて、虚構の長編物語が形成された。とはいっても、この『源氏物語』はそれまでの物語の水準をはるかに抜きんでて突然変異的でさえある。それはまず、一条朝の文化全体の水準が道長という指導者によって高められ、なかでも後宮文化の発展は著しく、多数のすぐれた女房たちが出現する状況にあったという環境をあげることができる。また、『蜻蛉日記』をつむぎ出した道綱母の強烈な自照精神が先鞭をつけていることも忘れることはできない。しかし、結局は、紫式部というすぐれた個性が、強靱な分析的観察力によってつかみ取った現実の姿を、すぐれた表現、構想力によって言葉の世界に縦横に拡大定位しながら、この世の眞実を浮き彫りにして行ったというところであろうか。紫式部の内面には『源氏物語』を書いてもおおたされないものがあつたらしいが、しかし、その才能を伸ばす場所と時代に恵まれて、ある意味では幸福であつた。

〔後期物語〕 『源氏物語』が世に出たあと、後宮社会を中心に多くの仮作物語が生み出されていった。それらを後期物語というが、『源氏物語』が高度な達成を示したあとでは後期物語の創作はそれなりの苦闘の連続であつた。『源氏物語』の重い影響を決定的に受けながら、それからどう脱出するかが、後期物語の作者たちの課題となる。時の流れに淘汰されて多くの作品が散佚した中で、生き残つた『狭衣物語』『夜の寢覚』『浜松中納言物語』の三長編物語は、さすがに注目すべきものを持っているといえよう。三篇の物語に共通していることは伝奇的要素の復活であらうか。『狭衣物語』には賀茂神社の神託、夢想がくり返され、笛の靈驗

による天女の降下や粉河での普賢の出現などもある。『夜の寢覚』には生霊事件があり、『浜松中納言物語』には夢と輪廻転生の思想が日唐に拡大された舞台の支えとなつている。こうした傾向は、『無名草子』の俊成女などはあまり好まないようであるが、一種のカンフル剤としての役目を作業者たちは期待していたらしい。なお、この時代に一風変わった趣向をこらした物語に『とりかへばや』がある。現存『とりかへばや』は改作本で、『古本とりかへばや』は散佚した。女らしい男、男らしい女として生まれた姉弟が、男女の姿を変えて世に出、さまざまな波紋を起こす。古本は今本よりも筋が荒削りでおどろおどろしいが素材が新鮮で「あれなる」こともあるというのが『無名草子』の評である。

〔短篇物語〕 『源氏物語』の巻々の中にも、長編的な筋と余り関わりを持たず、それだけで自己完結的な世界を持ちうる、いわゆる短篇の巻々があつた。『うつほ物語』も俊陰巻だけが独立して鑑賞されることがあつたらしい。そうした中で、平安時代後期には後宮や貴顕の文芸サロンで短篇物語が創作されていった。天喜三（一〇五五）年の六条齋院裸子内親王家物語合に女房たちの創作した十八篇の物語が提出され、そのうち小式部の『逢坂越えぬ権中納言』が『堤中納言物語』の一篇としてわれわれに伝えられている。もちろん物語発表の場は物語合のような晴れの場に限らず、随時文芸サロンに提出され、読者としての女房たちの批評や入れ智恵などから、続篇や新作物語が作られていたものと思われる。永続的な集中を必要としない短篇物語はそうした場に向つてついで、女房たちの相互啓発によって洗練されていったさまは『堤中納言物語』の諸篇を読めば明らかである。

（堀内秀晃）

たけとりもの
竹取物語

一巻

〔概括〕 平安時代物語文学の初期の代表作。かぐや姫を女主人公とする作り物語。

〔成立および概観〕 『源氏物語』絵合の巻に「まづ、物語のいできはじめのおやなる竹取の翁に、うつほの俊蔭を合せてあらそふ」と見えていて、早くから物語の始祖あるいは物語初期の代表作と考えられていたことを知りうるのだが、その成立年代は、未詳である。一般には、おおよそ九世紀の末葉から十世紀の初頭にかけて成立した、と考えられている。

成立年代を推定するための基本的な資料のひとつとして、たとえば『大和物語』の第七七段をあげることができる。源嘉種が桂の皇女（孚子内親王）に「竹取がよよに泣きつつとどめけむ君は君にと今宵しもゆく」という歌を贈ったのは「院（亭子院）に八月十五夜せられける」日のことであったが、『日本紀略』によれば、それは延喜九（九〇六）年閏八月の月の宴のことであった、と考証されている。すなわち、『竹取物語』は十世紀の初頭には、すでに成立し、享受されていたことを示しているのだ。成立年代を九世紀の末葉に想定することも、あながち不自然ではあるまい。

だが、厳密に考えようとするならば、源嘉種は、物語作品としての『竹取物語』を読んでいたのではなく、後に『今昔物語集』や『海道記』などに記録される（伝承）としての竹取説話を聞き知っていたのではないかと疑うこともできるのだ。その他いくつかの、

作品内部の、外部の資料の、さまざまな手がかりを併せ考えることによって、作品の成立を、十世紀の初頭あるいは九世紀の末葉に想定することが可能なのだ、と言いうるにとどまる。

たとえば、(1)物語の本文（諸本）に「頭中将」の語が見えることから、藏人所の開設された弘仁元（八〇〇）年以後の成立である（「とうの中将」を「かうの少将（高野少将）」の誤写とする説もある）。(2)登場人物の大納言・大伴の御行が批判的に描かれているのは、応天門の変で大伴氏が失脚した貞観八（八六六）年以後と考えなければならぬであろう。(3)『古今集』の仮名序には「今は富士の山も煙たたずなり」とあるから、「その煙、いまだ雲の中へたちのぼる」とする物語は、仮名序の書かれた延喜五（九〇五）年以前の成立であろう（物語の虚構性を考えれば、必ずしも従う必要はないのだが）。(4)大伴の御行の漂流の描写には、承和六（八八六）年の首原梶成の遭難の記事（『文徳実録』仁寿三年六月）が投影しているから、

『文徳実録』の成立した元慶三（八七二）年以後の作であろう。さらに、仮名による散文の成立時期、物語の中の歌の修辭法（縁語・懸詞など）、『源氏物語』絵合の巻の「絵は巨勢の相覧、手は紀貫之かけり」という記事の信憑性、物語に見える「髪上げ」や「時絵」などの風俗の状況などなど、さまざまな痕跡を検討することによって、九世紀末葉から十世紀にかけて、貞観（八五九―八六六）後半ごろから延喜（九〇一―九〇三）前半ごろまでの期間に成立した、と推定されているのである。

ほぼ妥当な見解に到達したと言いうことができるであろうが、最近の動向としては、九世紀末葉成立説に傾きつつあるようだ。「延喜年間（九〇一―九〇三）の成立か、もう少しさかのぼりうるかもしれない

い」(藤井貞和「竹取物語」学燈社、別冊国文学『日本古典文学研究必携』昭54)。「現在ではほぼ九世紀末葉というところまでつきつめられている」(野口元大「解説」、新潮日本古典集成『竹取物語』昭54)。

〈伝承から物語へ〉だが、『竹取物語』の場合、作品の成立年代も重要な研究課題ではあるが、物語が作品として形成されるにいたった背後のプロセスを解明することも、またきわめて大事な問題なのである。『竹取物語』の成立を考えることは、同時に、文学ジャンルとしての〈物語〉の形成過程を考えることにはかならないからである。

歌物語の『伊勢物語』が、その成立の前史に、口承の〈歌語り〉のぶあつい堆積を考えなければならぬように、作り物語の『竹取物語』が成立するためには、神語りや昔語りなどの〈語り〉の歴史が必要とされ、さらには、さまざまな説話の〈伝承〉が準備されていなければならぬのだ。

『万葉集』巻七の「淡海原の物語せむ」という最も古い用例が示しているように、物語は、もと口頭で語られるものとしてあった。

口頭で語られる内容にはかならない無文字の〈伝承〉としての〈物語〉が、文字を媒介とする〈書くこと〉との出会いをとげることによって、はじめて〈物語〉作品あるいは〈物語文学〉として成立したのである。物語(文学)は、伝承の世界をかかえこんで、だが、伝承の次元から離脱し、飛翔したのである。

柳田国男が「竹取物語が純然たる一個の創作で無く、世にある説話を採つて潤色したものだといふことは、もう何人かの註釈家の言に由つて、是を否み得る人は無くなつてゐることと思ふ。今日問題にしてよいのは其筆者の働き、即ち何れの部分が新しい趣向の添附

であり、どこが其時代に既に行はれて居たものの踏襲であつたかの境目如何であらう」(「竹取翁」「昔話と文学」昭13)と言っているように、説話から創作へのプロセスを掘り下げ、解き明かしていくことが、『竹取物語』の成立論ひいては物語文学の成立過程論、つまりは物語論・物語研究のかなめのひとつなのだ。

『竹取物語』は、では、どのように〈伝承〉の世界をかかえこんで成立したのか。たとえば、南波浩は、『竹取物語』(日本古典全書、昭35)の「解説」で、作品の構成にそくして、物語のモチーフ(物語内容の要素)とも言うべき「説話の型」を、次のように掲げている。

(一)かぐや姫の生ひたち……………(化生説話・致富長者説話)

(二)求婚(つまどひ)……………(求婚説話)

(三)難題……………(難題説話)

(四)御狩の御幸……………(相聞説話)

(五)かぐや姫の昇天……………(昇天説話・白鳥説話・羽衣説話・貴種流離説話)

(六)不尽の煙……………(地名起源説話)

これを、異常出生譚・致富長者譚・求婚難題譚・貴種流離譚・天人女房譚・地名起源譚、というように言いかえることも、また、別の視点から整理することもできるであろうが、それらを包みこむようにして、竹取翁説話ともいふべき伝承が存在していたことを、忘れてはなるまい。

いづれにせよ、『竹取物語』の成立以前から(現在にいたるまで)、さまざまな昔話や伝説などの伝承、民間口承文芸が行われていたのだが、物語は、それらの伝承を要素として編成し、変奏し、虚構を

加えて、作品として成立したのだ。話型（説話の類型）の研究が、やがては伝承から物語へのプロセスを解き明かしていくであろう。

〔構成〕ところで、『竹取物語』の構成については、田中大秀『竹取翁物語解』（天保2）が、次のように、物語内容を九章段に分けてから、近代の注釈書もおおむねそれに従ってきた。

一 かぐや姫おひたち

二 つまどひ

三 仏の御石の鉢

四 蓬萊の玉の枝

五 火鼠の裘

六 龍の頭の珠

七 燕の子安貝

八 御狩のみゆき

九 天の羽衣

最後の「天の羽衣」章段を「かぐや姫の昇天」と後日譚の「ふじの山」に二分して一〇章段とするような小異はあるが、基本的には田中大秀の見解が戦後の現在にいたるまで踏襲されてきたのである。それに対して、はじめて異説を提出したのは、片桐洋一であった（『日本古典文学全集』『竹取物語』解説、昭47）。

片桐洋一の構成把握は「外面的・形態上の特徴からなされた、いわば客観的なもの」で、末尾の「民間語原説話的説明」(i)よばひ、(ii)はちをすつ、(iii)たまさかる、(iv)あへなし、(v)あなたへがた、(vi)かひなし↓かひある、(vii)ふじの山)にもとづいて、次のように、七章段に分けたのである。

(一) 竹取翁の紹介とかぐや姫の出生

(二) 五人の貴人とその第一の求婚者石作の皇子

(三) くらもちの皇子と蓬萊の玉の枝

(四) 阿倍の右大臣と火鼠の皮衣

(五) 大伴の大納言と龍の頭の玉

(六) 石上の中納言と燕の子安貝

(七) かぐや姫、帝の召しに応ぜず昇天す

片桐洋一の見解は、形式主義的な処理を徹底することによって、最初の「よばひ」語源譚を「つまどひ」章段の中におしこめ、まぎれこませていた田中大秀説の不自然さを解決し、さらに、作者の構成意識を浮きたたせた。野口元大『竹取物語』（新潮日本古典集成）は、基本的には片桐説に従いながら、片桐説の(二)を二分し、(七)を三分して、計一〇章段としている。田中説の〈内容〉と片桐説の〈形式〉とを巧みに折衷した、とやうことができるだろう。

〔書名〕なお、ほとんどの伝本は、書名（題号）を「竹取物語」としているが、武藤本の外題や古活字十行本・前田本などのように「竹取翁物語」とするものもあって、『源氏物語』絵合の巻に見える「竹取の翁」や高松宮家本の「竹物語」はその略称だったと考えて、正式には「竹取翁物語」（竹取の翁の物語）だった、とするのが通説である。

竹取の翁が、伝承の世界における主人公であり、物語の世界の最初の語り手でもありえたことを考えるならば、物語の名称（書名）としては、やはり竹取の翁を明示することのほうがよりふさわしく、『源氏物語』蓬生の巻や『六百番歌合』顕昭陳状などに見える「かぐや姫の物語」というよびかたは、内容（女主人公）を言いあらわそうとした俗称だ、と考えてよいであろう。

〔作者〕未詳。作品の成立から考えて、九世紀の後半から十世紀にかけて生きていたと思われる男性、たぶん中下級の貴族階級に属して、都市（平安京）に住む批判的な知識人、あるいは学者・文人か僧で、中国文学および日本の歴史書に深い関心をもち、かつ和歌をよくした人物。ほほ以上のような作者像の輪郭が浮かんでくる。

物語のいではじめのおやなる『竹取物語』の誕生は、同時に、〈書くこと〉によって〈伝承〉の世界から離陸した物語（作者）の誕生でもあったが、作者の誕生は、確かにひとりの表現者の誕生ではあっても、職業的な作家や、著作権や、名声や、印税収入の確立では、むしろありえなかった。おもだたい歌については、その一首ごとに作者（読みびと）を記憶し、記載することが行われていたにもかかわらず、文学としての市民権をえていなかった物語は、むしろ作者の固有名詞を記録せず、作者もまたみずからを表さないことが当然と考えられていた。

無記名性は、物語の本質に根ざして、署名のないことこそが、物語の作者のありかたにふさわしかったのである。神に対する物がそうであったように、正統ではない、公認のものではない、権威づけられていない、だからこそ不気味でもあり、いかがわしくもあり、自在な表現でもありえた、そのような物語の作者のありかたに。

『源氏物語』や『堤中納言物語』の一篇「逢坂越えぬ権中納言」の作者名がわかってしまったのは、ごく稀な例外であって、作者にとっては不幸なことであつたかもしれないのである。

だが、初期物語の代表作を書いたのは、誰か。作者論という名の作者さがしは、早くから試みつけられ、なおも試みつけられたいくべきであろう。ここでは、従来の諸説を列挙して紹介するにと

どめよう。

- (a) 源順説（小山鏡・武田宗俊）
- (b) 河原左大臣・源融説（五十嵐政雄・吉川理吉）
- (c) 僧正・遍昭説（岡一男・神田秀夫）
- (d) 紀長谷雄説（三谷邦明）
- (e) 春澄善繩説（関根貴司）
- (f) 賀茂氏・賀茂峯雄説（原岡人）
- (g) 忌部氏（荒井義雄）・斎部氏関係の一族（塚原鉄雄）
- (h) 漆部氏のながれをひく人物（飯倉篤憲）
- (i) 反天武帝側の人物、大友皇子の一族かその縁故者、僧侶階級か

学者（三谷栄一）

(a) (e) は、作者に特定の個人名を想定する説。(g) (h) は、特定の氏族あるいは集団の中に作者を想定する説。(f) は、その中間的な折衷(i) は、作者の傾向と教養から想定した説である。(e) は、歴史と支学（老荘・神仙思想）への関心に着目して試みに提出したことのある仮説であつて、もとより固執すべきほどのものではない。

特定の個人・固有名詞にたどりつこうとする作者論は、外部資料の乏しさという制約から、やがて限界につきあたらざるをえないであろう。特定の氏族をめざす作者論も、氏族伝承の解体過程から生まれてきた物語の本性と矛盾せざるをえない。作者の階層や境涯を考へること、作品の性格や主題を考へることが、文学論として過不足なくつりあうような、そういう作者論の可能性を追求すべきであろう。

〔梗概〕今は昔、竹取の翁という者がいた。名を讃岐の造（麻呂）という。根もとの光る竹の中から小さな子を見いだして育てると、